

使うための工芸品を作り続ける、注目すべき京都の作家3人。



©酒 忠之

つくだしんご 佃真吾さんの作品

縁や底のカーブも美しい、柳行李のふたを模したお盆。お茶セットを入れたり、雑多なものを収める乱れ盆に。栗行李蓋盆(21×26×高さ6cm)7万8750円。京都の常設店は、佃さんの制物から指物(家具作品)まで展示している『六々堂』(京都市東山区清水3-342 ☎075-525-0066)。



上右・灰緑釉片口(直径17.5×高さ9cm)1万500円。上・安南染付小鉢(直径13×高さ4cm)4,200円。

あらかよしたか 荒木義隆さんの作品

京都の常設店は、『うつわや惣々』(京都府木津川市州見台7-1-21 ☎0774-72-6967)、『高台寺 中谷』(京都市東山区高台寺榎屋町36-13 ☎075-551-6008)。



輪島塗職人のもとで修業後、'94年独立。著書に『毎日つかう漆のうつわ』『美しい工芸』(共に新潮社)など。全国で個展を開催。http://www.murimono.net/

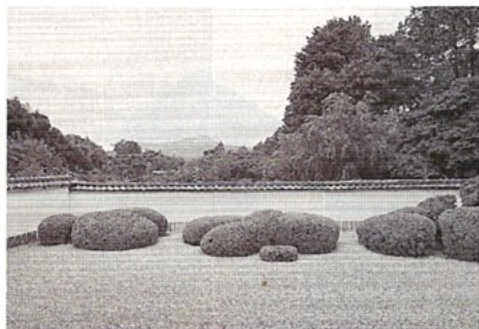
石川・輪島に工房をかまへ、日常に使うための漆の器を作り続けている赤木明登さん。「京都で好きなモノ」といえば、やはり工芸家の仕事があげられた。「ぼくが紹介したいのは、黒田辰秋の後継者である若き木漆工芸家、新宮州

しんぐうしゅうぞう 新宮州三さんの作品

左上・下段から上段にいくにつれ、なだらかに大きくなる円。菓子重などにしたい漆器。素材は栗。三段お重(直径14~16×高さ14cm)5万2500円。左下・木を削りだした跡を感じる、美しく微妙なカーブを描く榊の台。木台(約10×41.5×高さ5cm)2万9400円。●4月13日(水)~21日(木)、『座辺の骨董 幾一里』(京都市中京区坊城通後院通下ル ☎075-811-8454)で展覧会あり。京都の常設店は、『うつわや あ花音』(京都市左京区南禅寺福地町83-1 ☎075-752-4560)



三さんと佃真吾さん。そして、器作りの大先輩として追いかけ続けている陶芸家、荒木義隆さんの作品です」
京都出身の黒田辰秋は、カフェ「進々堂」の長テーブルなどが代表作。昭和時代に活躍した木漆工芸界のスーパーヒーロー。新宮さんは、辰秋の直弟子である村山明さんの弟子で、佃さんは、辰秋の息子の黒田乾吉さんの弟子。木のかたまりから刃物で形を削りぬき木地を作り、漆を塗る「削物」の職人だ。「黒田辰秋はかつこいいけど、高度成長期のパワーがありすぎるような作品。新宮さんと佃さんが作るの、そういうアクが抜けて、さっぱりと、今の時代に使えるもの。削物って、泥臭くて強いものになりがちだけど、その一歩手前で、こつりしすぎないのがいい」
陶芸家の荒木さんも、暮らして生きる器を作る人。ペトナムの若い陶芸家の窯で技術指導を兼ね作陶するなど、伝統と新しさのある豊かな作風が魅力。「京都の陶芸は、作家の精神性を鑑賞するもの、または彫刻的な現代美術の流れにあるものが主流。そんな中、使うことを意識させてくれたのが荒木さん。『使うための器』の先駆者です」
一方、「好きな場所」は鷹峯にある2つのお寺。どちらも人が少ないことと、素晴らしい庭と血天井があるという共通点。血天井とは、伏見城で切



©桐本マチコ

正伝寺

しょうでんじ ●京都市北区西賀茂北鎮守庵町72 ☎075-491-3259 9時~17時 400円 白砂、リズムカルな配置の植え込み、白塚、その先は比叡山の借景。ここで上を見ると血天井が。MAP ①A-1



源光庵

げんこうあん ●京都市北区鷹峯北鷹峯町47 ☎075-492-1858 9時~17時 400円 本堂にある、悟りの窓と迷いの窓。庭園の紅葉を窓越しに望める秋がとくに素晴らしいとか。MAP ①A-1

腹した武士たちの血しぶきや手形・足跡が残る床板を天井にしたもの。「正伝寺は、余計な人工物のない比叡山借景の庭。源光庵は、悟りの窓という丸い窓とその隣にある四角い迷いの窓が、禅の世界を表現しています。その静寂さと、血天井の無常観のコントラストは、感慨深いものがありますよ」